

扇や通信 '12 秋号

厳しい暑さもようやく去って、あだたら高原は一足飛びに秋がやってきました。その速さは、燃え立つような木立の緑や蝉しぐれは夢だったのかと思われるほどです。

これから冬の始まるまで、岳の野は、桔梗やおみなえし、われもこう、萩、野菊などの花々で美しく彩られますが、草むらの中で、青い宝石のように咲く、りんどうの気高さ、可憐さはまた格別です。今回は、りんどうにまつわる不思議なお話をお届けいたします。

日ごとに秋が深まり、山々は華やかな朱や黄色に衣を変え、野は銀色のすすきの波が寄せ、安達太良はくっきりと青くそびえ立ちます。降るような虫の音と満天の星、こんなと湧き出る豊かな湯、山の幸、里の幸もおいでをお待ちしております。

秋の岳温泉でごゆるりと佳き休日を……。

女将

昔、岳温泉のふもとに、小さな百姓家がありました。その家の主は早くに亡くなり、十二歳になる息子・佐吉と母親ハツがたった二人で、わずばかりの田畑を耕してくらしておりました。

ハツは、男勝りの働き者でしたが、心根がやさしく、忙しい野良仕事の合間に、野原や山や道端に咲く花をながめるのが好きでした。

「佐吉、見でみる。山だの野っぱらに咲く花は、誰に見られなくても、いっしょうけんめい咲くべ。えらいなあ、めんごいなあ」とよく言っておりました。

「なあ、りんどうは、真っ青な高い空が花になって降って来たみでだべ」——いつもそう言って母親はりんどうの前にかがみこんで、うっとりながめるのでした。

草刈りの時は、草むらに伸びているりんどうの茎を注意深くよけて鎌を動かす、秋に花が咲くと、また丁寧に花の周りを残していました。村の人たちは、そんなハツの手間暇のかかる作業を「バカ力の草刈り」と笑っていましたが、母親はいっこうに気にとめませんでした。

りんどうと少年・佐吉のお話



そんな母親に習って、佐吉もりんどうの芽や育ってきた莖や、ようやく付いたつぼみを大切に守って草刈りをし、青い花が咲くと、「がんばったなあ」と声をかけるのでした。

母子は、朝暗いうちから、手元が闇で見えなくなるまで働いておりました。無理がたたって、ハツは倒れ、床に伏せてしまいました。佐吉の懸命の看病も空しく、ハツは息子の行く末を心配して、「おまえひとりでは百姓はできね。岳温泉さ行って、どこかの宿で使ってもらえ」と言い残して亡くなりました。

峠の茶屋

ひとりぼっちになった佐吉は、母親が言ったとおり、岳温泉めざして山道を上っていきました。何のあてもありませんが、一軒一軒宿を回って、働き口を探すつもりです。

半日も歩いてようやく峠にさしかかった時、突然真っ黒な雲が空を覆い、烈しい雨が降り出しました。佐吉が雨の中を右往左往していると、ブナの大木の下に小さな茶屋が見えます。「おお、助かった！」佐吉は茶屋に飛び込みました。

中にはきれいな女の人がひとり、いろり端に座っていました。いきなり駆け込んで来た少年に、その人は驚きもせず、「おやおや、ずぶぬれだね」と、手ぬぐいを持ってきて、佐吉の頭や顔をふいてくれました。その人からは、佐吉がこれまで嗅いだこともない、涼やかないい香りがすかに漂ってききました。

「そのままで風邪をひくよ」女の人は、店の奥にある風呂に大急ぎで薪をくべ、風呂がわくうちに、と温かいかゆを出してくれました。佐吉が夢見心地で風呂を出ると、ござっぱりした着替えまで用意してありました。

そのうち雨が暮れましたが、雨は激しくなるばかり。風も出てきて、古びた茶屋の戸や窓がカタカタゆります。「おまえさん、岳温泉に働き口を探

しにいくんだったって?でも、これじゃ無理だね」女の人は、佐吉が何も話していないのに、そう言って、美しい三日月のような眉をひそめました。「まず、今夜はここに泊まっていきなさい」

小鳥の声で佐吉が目をさますと、外はぴかぴかの秋晴れです。世話になったお礼のつもりで、佐吉は昨夜の風雨でゆがんでしまった戸や窓、風に飛ばされた屋根の杉板をせつせと修理しました。「まだ子供でも、男手があると助かるものだねえ」女の人は笑顔で、屋根の上にいる佐吉に声をかけました。朝日を浴びて金色に光るような笑顔に、佐吉はうっとりして、思わず手にしていた金づちを落とすところでした。

茶屋のまわりの片づけがひと区切りすると、女の人が大きな桶を抱えて沢まで水を汲みに行くというので、佐吉は「俺がやる!」と桶を奪って何度も沢を往復しました。「ありがたいねえ、この水くみが苦勞なんだよ」女の人は



うれしそうにいました。

昼近くなると、旅の葉売りや、湯治に行く人など、ぼつぼつ客がやって来ました。女の人がお茶や甘酒、焼き餅などを出している間、佐吉はかまどで湯を沸かしたり、茶碗を洗ったり、見よう見まねで餅を焼いたり、薪を割ったりして手伝いました。

一日が終わると、女の人はいくつたりして、いろいろの前に座り込み、「ほん」とにありがとう。おまえに助けられたよ」とほほ笑みました。

輝くような長い黒髪を後ろで束ねて、透き通った白い顔に、深い青に見える瞳―「ほんとにきれいな人だ」と佐吉はあらためて驚きましたが、強い風の中で折れそうな、ほっそりとたよりなげな体に心が痛みました。

「あの、あなたは名前は何でゆうんだべ。何でこだ山の中でくらしてんだべ」と佐吉がおすおすたずねると、その人は「名前はない。青い空と山が好きでここに居るんだよ」といいます。「なんぼ青い空と山が好きだって、

こだに細っこい人にこの仕事はきついべなあ―佐吉は次の日も、また次の日も茶屋を手伝いました。

いろいろ端に眠り、日の出とともに起きて、一番星が出るまで働く毎日でしたが、野良仕事で鍛えた佐吉にはなんということもありません。女の人の役に立って、「ありがとう、今日も助かったよ」とほほ笑んでもらえるのが、佐吉の何よりの幸せでした。

それから何日たったのか、いくつの季節が巡ったのか、佐吉にもわかりませんが、茶屋は山の中の峠の粗末な小屋だというのに、とびきりきれいな女と働き者の小僧がいる、と評判になり、一日に何組も客がやってくるようになってきました。女の人も佐吉もコマネズミのように働きました。

五段のたんす

ある日、女の方は、「働きすぎてすっかり疲れたので、五日間、里に帰って休んでくるから、店は休みにして留守番をしておくれ」といいました。

「女の一人旅はあぶねえって母ちゃんが言っていたが、俺が送って行く」と佐吉が言っても、その人は「いいえ、私は大丈夫」と聞き入れません。心配しながら佐吉が戸口で見送ると、その人はふつと振り向いて、「留守番で退屈したら、奥の部屋のたんすを開けてごらん。引出しが五段あるけど、五段目は決してあけないこと。いいね」と言って出かけて行きました。

留守番の一、二日は、小屋の修理や薪割りやキノコ採りをして過ごした佐吉ですが、さすがに三日目は退屈して、初めて入ってみる奥の部屋に行ってみると、黒塗りの小さなたんすがあります。佐吉はこの茶屋に来てから、一度も奥の部屋に入ったことはありません。そこで、「よその家」のたんすを開けるなど、母親が生きていたら、こっぴどく叱られたことでしょう。だいいち、自分の家のたんすでも、



子供が勝手に開けるなんて許されないうことでした。

「ほんとにいいんだべか…」佐吉はたんすの前でドキドキしながら座り込んでいましたが、どんなおもしろいことが待っているのか、わくわくする気持ちをおさえきれません。おそろおそろ一番上の引き出しを開けてみると、なんとその中には、佐吉の住み慣れた村の景色が広がっているではありませんせんか。

桜が咲き、菜の花が咲き、たっぷり

水を張った田んぼでは、村の人たちが歌いながら田植えをしています。あぜ道を子供たちがはしゃぎまわって走り、犬もうれしそうについていきます。子供のひとりは、どこか幼いころの佐吉に似ていました。

息をのみながら二段目を開けると、今度は蝉の声がひびいてきます。田んぼには青々と稲が育ち、蛙も鳴いています。村の人たちはせつせと田の草とりにしています。その中のひとりは、佐吉の母親にそっくりでした。

「母ちゃん！」佐吉は思わず声をかけましたが、聞こえている様子はなく、その人は一心に働いています。

そのうち夕焼けになって、娘たちが着飾っていそいそと歩いていきます。広場では盆踊りが始まっています。にぎやかな太鼓や笛の音、村人のざわめきが、夜空に吸い込まれていきます。空には天の川が銀色に光っていました。

三段目は、一面の黄金色の田んぼで、稲刈りの真っ最中です。あたりの山々は美しく紅葉して、遠くから祭ばやしも聞こえてきます。うっとりしている、突然景色が変わって、秋の草原が現れました。よく見ると、母子らしい二人がせつせと草刈りをしていきます。しかし二人は時々、鎌を動かす手を止めて、注意深く何かをよけては、また草刈りを始めています。

「ああっ、これ、母ちゃんと俺だ！りんどうの花、よけてるんだ！」佐吉

は涙があふれて止まりませんでした。涙がかすんだ目で四段目を開けると、そこは銀世界です。子供たちは雪合戦に夢中で、大人たちは道の雪かきで忙しそうです。どこからか餅つきの音も聞こえてきます。やがてあたりが暗くなると、しんしんと雪が降りはじめ、家々にはぼっかり橙色の灯がともりました。村のはずれにあった佐吉の家に似た、小さな家にも、あったかいあかりがつかまりました。



佐吉は、何度も何度も引出しを開けては、その不思議な世界を眺めておりました。食事も寝るのも忘れるほど、たんすの前で過ごしました。

そして、女の人が明日帰って来るという五日目、佐吉はいつものようにわくわくしながら引出しの取っ手に手をかけましたが、どうしても五段目を見たくてたまらなくなりました。決して

開けるな、と言われましたが、体がもうムズムズしてたまりません。「ちっと、隙間からのぞくぐらいだらいいべー」佐吉はついにほんの少し、五段目の引出しを開けてみました。中をのぞいてみると、真っ暗で何もみえません。もう少し開けると、暗闇が広がるばかりです。じれったくなつて佐吉は引出しの中に頭を突っ込みました。

―そのとたん、ゴオーッと激しい渦巻が湧き上がり、佐吉を呑み込んでしまいました。

りんどうの国

気がつくところには、見渡す限りのりんどうの花が満ちた草原でした。高く澄んだ青い空から、何千何万というりんどうの花が次々に降ってきます。花々はふれあう度に、透き通った鈴のような音色を立てました。チリリ、チ

リリ、チリリ、と花が歌うようにゆれ、草原の向こうには銀色に光る川が流れています。

佐吉がわれを忘れて座り込んでいると、花々がいつせいに左右に分かれて、青い衣をまとった美しい女の人がこちらにやってきました。

輝くような長い黒髪をそよ風になびかせて、透き通るような白い顔、青く深い瞳、ほほ笑んだやさしい口元―「あっ、あんだは峠の茶屋の人だべー」佐吉はびっくりして叫びました。

「いいえ、茶屋なんて知りません。おまえが夢を見たのだでしょう」とその人は静かに笑いながら言いました。

「私は、りんどうの精の女王です。おまえの母親も、おまえも、りんどうをずっと大切にしてくれた。いつかお礼をしたいと思っていました。こんなに早くその時が来るとは…。おまえが大人になって、何か困ったことがあった時に、この国の扉をあげさせるつもりだったのに。」

おまえは心根がよくて働き者です。きつとしあわせになるでしょう。でもこれからは、やってはいけない、と言われたことは、ちゃんと守るんですよ。佐吉はたんすの五段目をあけてしまったことを思い出してドキッとしました。女王は、そんな佐吉をほほ笑んで見えています。まわりのりんどうたちもクスクス笑ってゆれました。チリリ、チリリ、チリリ、美しい音がさざ波のように広がりました。

驚きっぱなしで何も言えないでいる佐吉に、女王は言いました。「これからも、りんどうを可愛がっておくれ。秋になったら毎年、お前に会うのをみんな楽しみにしていますよ」一草原を埋めた一面のりんどうの花が、澄みきった鈴の音を一段と高くしてゆれました。

「じゃあ、お帰り。その前にあそこをござんなさい」女王は銀の川の方を指さすと、霧のようになびいていきました。

佐吉が遠くの川を見ると、亡くなった母親がりんどうと同じ青い色の衣を着て、にこにこ手を振っておりました。

「あーっ、母ちゃんー！」駆け寄ろうとした時、誰かにビシビシ類を打たれて、佐吉は我に返りました。気が付くと、地面に倒れている自分を見知らぬ男女が心配そうにのぞき込んでいます。

峠の出会い

「ああ、よかった。気がついたかい?」「こんな山の中に泥だらけで倒れていてーいったいどうしたんだい?」

その人たちは、岳温泉の宿の主と女将でした。城下町まで用足しに行った帰りに峠にさしかかったら、男の子が倒れていてびっくりました、と言います。

佐吉があらためてあたりを見回すと、茶屋など影も形もありません。小屋の脇のブナの大木だけが、いちだん



と大きくなっていました。

「このあたりに、茶屋はなかったが…」といぶかる佐吉に女将は言いました。

「さうさう、ずっと昔、ここに評判の茶屋があったって聞いたよ。それはきれいなおかみさんと働きの小僧がいて、繁盛していたらしく」「さう、この大木の下あたりにあったさうだ。うちの宿のお客さんが、ひいじいさんから聞いた話だと。そのひいじいさんは、湯治に行く度、その茶屋によって、甘酒飲んだって…」

佐吉はすっかりわけがわからなくなつて、ぼんやり座り込むばかりです。夫婦は風呂敷から握り飯を出して佐吉に食べさせ、あれこれと身の上を聞きましましたが、佐吉は、茶屋のことだけは、自分も信じられなくて話しませんでした。

「ちよつとさうい、うちで丁稚をひとりほしいところだ。働き口を探してる

んなら、うちの宿で働いておくれ。見ればおまえさん、心根がよさそうで、働き者のようだね。こんな丁稚がほしかったんだよ。」二人はにこにこ佐吉をながめました。「そだに泥だらけでは話になんね。早く宿さ帰って、一風呂浴びろ」夫婦は、よさそうな丁稚が山道で見つけたのも縁だ、と喜びあいながら、岳温泉に戻つていきます。

まだ夢の中にいるような心地で、佐吉は女将の後をついて行きました。

「さ、早く帰ろつたよ」いそいそ歩いていく女将の帯には、りんどうの花が一輪、青々と染められていました。

佐吉がその帯の模様をぼんやり見つめながらついで行くと、さあっと一陣の風が渡つていきました。その時、女将の帯のりんどうの花がゆらゆらゆれるのを、佐吉ははっきりとその目で見ただのです。

こうして宿の丁稚になった佐吉は、ふもとの村や峠の茶屋にいた時に増して、「心に働きました。宿の主と女将は、「神様からの授かりものようだ」と佐吉をつれ帰ったことを喜びあいました。

それから長い年月がたち、佐吉は宿の名番頭として評判になり、沢山の顧客を作つて、宿を繁昌させました。その後佐吉は、宿の末娘を嫁にしたのれん分けしてもらい、宿の名を「竜胆や」としました。「竜胆や」は小さな宿ではありましたが、りんどう色の地

に白く「竜胆や」の文字を染め抜いたのれんが、温泉まちの通りに咲いた一輪の花のように美しく、人目を引きました。佐吉のその宿のもてなしの良さも評判を呼び、全国から客が集まつて、長く繁盛したといつていいです。

いまも、りんどうの花が咲く山道を行くと、もしかしたらブナの大木の下に小さな茶屋が見つかるかもしれせん。しん、と誰もいない部屋の奥に、黒塗りのたんすがあっても、開けないでそっとしておいてください。

扇や。ペア宿泊券をいじり

●大切な方、親しい方へのあったかいプレゼントに、扇やのペア宿泊券(お二人でご一泊三万円)はいかがでしょう。

岳温泉 野の花一輪 香る宿

政府登録旅館



扇や

あだたらの宿

福島県二本松市岳温泉1-3
TEL.0243(24)2001 FAX.0243(24)2004